

第17期第4回青森県生涯学習審議会 会議概要

日時	令和7年9月25日（木）10：00～12：00
場所	青森県庁南棟 教育委員会室
出席者	▼委員 島守 詩子 千葉 栄美 吉川 康久 小野 淳美 岡 詩子 米沢 美幸 小笠原 秀樹 越村 康英 松浦 淳 ▼事務局 清川 喜之（生涯学習課長） 西塚 努（生涯学習課学校地域連携推進監・課長代理） 三上 崇裕（生涯学習課企画振興グループマネージャー） 他4名
内容	1 開会 2 案件 （1）実地調査の結果報告・分析について （2）審議事項に係る答申骨子案（方向性）について （3）その他 3 閉会
配付資料	1 第4回青森県生涯学習審議会次第 2 第17期青森県生涯学習審議会委員名簿 3 第4回青森県生涯学習審議会座席図 4 【資料1】第17期青森県生涯学習審議会実地調査先一覧 5 【資料2】第17期青森県生涯学習審議会実地調査結果報告 6 【資料3】第17期青森県生涯学習審議会・第37期青森県社会教育委員の会議スケジュール 7 【参考1】実地調査先から提供された資料 8 【参考2】第17期諮問書

1 開 会

(内容省略)

2 案 件

会長 本日は、まず前半で実地調査の成果を皆様で共有し、休憩を挟んだ後半では、答申の骨子案について、その方向性に関して自由に議論いただきたいと思います。

本日がちょうど第4回の審議会となり、予定されている全7回の中盤、折り返し地点に差し掛かってきている頃合いかと思います。つきましては、諮問事項も念頭に置きながら議論を進めていきたいと考えておりますので、皆様の協力をお願いします。

では、早速、案件の審議に移ります。最初に、実地調査の結果報告と分析について、事務局から説明をお願いします。

(事務局から「資料1」「参考2」について説明)

会長 ありがとうございます。それではこれから、委員の皆様から実地調査の結果を報告いただき、その内容を全員で共有していきたいと思います。進行は、資料1「実地調査先一覧」に沿って順番に進めていきます。時間も限られていますので、各委員の皆様には、5分程度で報告ください。

また、もう一点お願いがあります。答申をまとめていく上で、先ほど確認した3つの諮問事項と絡めながら、どのような点が学び取るべき知見であるかということを中心に報告いただけると幸いです。よろしくお願いします。

では、最初に「男女共同参画地域みらいねっと」の調査について報告をお願いします。

委員 それでは、「一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと」の取組について報告します。

まず、活動概要ですが、「みらいねっと」は男女共同参画社会の推進を目的として設立された団体です。その活動の中で、東日本大震災をきっかけに、避難所の運営には男女共同参画の視点が重要であることに着目し、防災・減災活動を中心に取り組んでいるとのことでした。様々な団体を対象に活動されていますが、特に中学校において「誰一人取り残さない安全安心避難所運営訓練」を中心に実施されています。当日は八戸第一中学校での避難所運営訓練を拝見しましたが、中学生と地域の大人たちが一緒に参加し、世代を超えて協力する姿が非常に印象的でした。この訓練の特徴として、団体の中心的な方がおっしゃっていた男女共同参画の視点が強く反映されているという印象を受けました。

事業を進める上での工夫としては、学校だけではなかなか取り組むことが難しい多様性やジェンダーの視点について考える良い機会になっていると感じました。また、地域に住む要配慮者など、弱い立場の人々の困りごとにも気づけるような工夫がなさ

れていました。さらに、避難所の運営を行政やボランティア任せにするのではなく、一人ひとりが主体的に行動することの大切さが繰り返し伝えられており、中学生にとっては貴重な学びの機会になったのではないかと感じています。

次に連携についてですが、実際のところボランティアだけでは活動の持続が難しいため、スポンサーと連携して資金を獲得しているとのことでした。また、行政とのつながりを保ちながら地域住民と共に活動を進めている点が強みであると感じます。加えて、女性防災リーダーの育成も同時に行っており、そのリーダーの方々が避難所運営訓練に協力していることも、活動を持続させるための重要な取組であると思いました。

広報活動については、主にチラシや口コミが中心ですが、スポンサーと連携することで情報発信の機会も設けているとのことでした。

事業の成果としては、中学生が大人と一緒に活動することで、社会の一員としての責任を意識する貴重な経験になったと強く感じました。そのことを通じて、地域住民の方々も、避難所運営を特定の人に任せるのではなく、自らも担い手になるという意識が芽生えているように見受けられました。これは、防災活動にとどまらず、地域づくり全体に寄与していくのではないかと感じています。

課題としては、継続的に多くの人々を巻き込みながら活動を実施していくための体制づくりが挙げられます。中学校での取組が単発の授業で終わるのではなく、その活動をいかにして地域に根付かせ、継続させていくかという点が課題だと感じました。

担い手の育成・確保に関しても、先ほどの課題と同様の内容になりますが、現在の活動を地域の担い手へと広げていくことが大きな課題であると感じています。また、現代は学校に様々な地域の課題が寄せられています。活動のスタート地点として学校が中心的な役割を担うことは重要かもしれませんが、全く関心のない子どもたちが、学校での活動をきっかけに何かに気づいたり、その大切さを感じたりする機会を与える上で、学校という場は重要であると思います。しかし、その後の活動を地域や町内会とどのように継続していくかが大きな課題ではないかと考えています。

今後の展望としては、防災を切り口とした活動を、地域全体の主体性を育む活動へと発展させていくことが重要であると感じています。

所感としましては、防災というテーマは老若男女を問わず、誰にとっても必要な課題であるため、活動の入り口として非常に優れたテーマであると思いました。また、この訓練を拝見して、活動が防災にとどまらず、教育と密接に結びついていると感じました。災害時の行動を学ぶことが、人としてのあり方や地域社会のあり方を考える上でも、非常に重要な取組であったと感じています。

会長 ありがとうございました。子どもたちと地域の大人たちが、防災を切り口に共に学んでいくという取組についての報告でしたが、何か確認しておきたい点があれば発言をお願いします。よろしいでしょうか。

私から一点だけ質問させてください。今回視察された八戸第一中学校の防災訓練は、主催が学校だったのでしょうか、それとも「一般社団法人地域みらいねっと」だったのでしょうか。

委員 八戸第一中学校の関係者、つまり保護者の中に「みらいねっと」の活動に関わっている方がいらっしゃったそうです。学校としても避難訓練等を実施する必要があり、最近では様々な工夫が凝らされた避難訓練が行われている中で、その保護者の方から「このような活動があります」と紹介を受け、学校側がそれを避難訓練、あるいは防災訓練の一つとして取り入れたということのようです。

会長 2番目は、大鰐町の「プロジェクトおおわに事業協同組合」の取組についてです。報告をお願いします。

委員 皆様ご存知かと思いますが、大鰐町はかつて多額の負債を抱え、「借金町」と言われていました。このままでは町が立ち行かなくなるという危機感から、町を元気にするための地域おこし活動をしていたメンバーが母体となり、このプロジェクトが始まりました。その中で、こどもに関する取組としては、翌年に「元気隊キッズ」が発足し、小学校5、6年生を対象に活動を開始しました。現在の参加児童数は20名から30名ほどで、活動内容の一つとして清掃ボランティアを行っています。駅など町内の人々が集まる場所を、大人とこどものチームで清掃しています。また、学校菜園で野菜を育て、収穫した野菜を東京にある県のアンテナショップで、キッズ隊のメンバーが自ら販売体験を行います。昼に販売体験をした後、夜には大鰐町をPRするための交流パーティーを開催しています。そこにはしっかりとした仕掛けがあり、東京で活躍する著名な方々、誰もが知っているような方々を招いて交流する機会を設けているとのことでした。

取組を進める上での工夫としては、大人たちには「町の悪口を言わない」というルールを徹底させています。大鰐町のポジティブな側面をしっかりと語り、コミュニケーションの取り方を工夫してもらうことで、こどもたちにマイナスイメージを植え付けないようにしている点が素晴らしいと感じました。また、販売体験にしても何をやるにしても、非常に念入りな下準備をしているという点が工夫されている点だと思います。

次に連携についてですが、学校菜園を利用していることや、対象が小学校5、6年生であることから、小学校との連携を図っています。活動開始時に校長先生や教頭先生といった管理職の方々の理解があったこと、そこでのつながりがあったことなどが大きかったようです。また、先生方が活動や募集に理解を示してくださり、その協力体制が数年で先生方が異動しても続いているという点で、学校との連携が非常に重要であると思いました。町との連携については、補助金の関係や、東京へ行く際の費用を助成してもらうなどがありました。ただ、町だけに頼るのではなく、様々な事業に応募して補助金を獲得するという形で、国との連携もありました。

広報活動は、学校へのお願いと、小さな町ならではの口コミが中心です。先輩から「参加して良かった」といった評判が広まっているとのことでした。

成果としては、大人たちが町の悪口を言わないことで、こどもたちが活動を通して大鰐の良いところを自然と耳にするようになり、体験を通じて変わっていくという点

が挙げられます。その子どもたちの姿を見た親や祖父母を含む家族もまた、「大鰐はダメだ」という意識から「こんなに良いところがあったのか」と町の良さを再認識し、意識が変化してきているとのこと。これには18年間という継続の力があるからこそ、こうした成果が現れているのだと思いました。18年も経つと、初期のキッズ隊メンバーが大人になり、町に戻ってきて新たなリーダーとなっているという点も大きな成果です。時間はかかりますが、このような循環が生まれることで良い結果に結びつき、子どもたちの地域づくりへの参加につながっているのだと感じました。

課題としては、事業の主体が時代とともに変化し、「ワニカム」も経営状況が赤字になったり黒字になったりと非常に不安定なようです。そうした経営上の問題を抱えながら活動費も捻出しなければならない点が課題であるとのことでした。最終的には5、6年生の2年間で全員を東京へ連れて行くという目標を掲げているようで、保護者からも一定の自己負担はしてもらっているものの、やはり資金面で苦労しているというお話でした。

参加者の感想についてですが、活動開始当時は町内に小学校が数校あったそうですが、現在は統合により1校からの募集になったにもかかわらず、参加人数は20人から25人を維持しているとのこと。また、家族からの感謝の言葉も寄せられているそうです。そして、この18年間の活動の中から、様々な新たな活動へと広がっているというお話でした。

担い手に関しては、この活動を率いる相馬さんという方は、自治体の間では非常に有名で、ご存知の方も多いです。そのように非常に影響力のある方がいて、その後継者として、現在の40代の常務さんを一本釣りですカウトしたそうです。しかし、その次の後継者は現在の常務さんが自分で探していくしかないとのこと、この点が活動をさらに広げていく上での課題なのかなと感じました。

今後の展望としては、大鰐町でやりたいことはまだまだたくさんあるとのこと。次は宿泊施設の再生を考えているそうです。かつて大鰐町には多くの旅館があり、スキースキーの全国大会なども開催され、選手を収容できるだけのキャパシティがあったのに、今では選手たちが弘前や秋田の方へ宿泊しているという現状があります。そうした状況を改善するために、旅館の再生など、子どもに直接関係はしませんが、そういった方面へも活動を広げていきたいということでした。

全体を通しての感想ですが、この取組はやはり相馬さんという「人」の力、その影響力が大きいと感じました。同時に、どの活動においても「お金」というものが課題になるのだなということを痛感しました。子どもたちを活動に参加させる上では、現在ある学校運営協議会や地域共同活動本部などを活用し、もっと広く地域の人々に活動を知らせ、参加を促していくことができないかと感じました。このような取組が広がっていくことで、子どもたちや大人たちの自己肯定感の向上にもつながっていくのではないかと思います。「悪口を言わない」というところから始まり、それがポジティブな意識へとつながり、郷土を愛する心を育み、将来的にそうした気持ちを持った若者を増やしていくという点は本当に素晴らしいと感じています。中心となる人物を発掘することがいかに重要であるかを改めて感じました。

会長 ありがとうございました。「大鰐元気隊」及び「元気隊キッズ」の取組についての報告でしたが、皆様から何か確認事項等がありますか。よろしいでしょうか。

では、3番目は、むつ市の「大畑公民館」の取組です。お二人から報告をお願いします。

委員 こちらの公民館の事業は、大きく分けると、成人教育事業と青少年のための事業に分けられます。青年教育事業の内容としては、ゼミナール形式で様々な講演を聞いたり、体験事業を行ったりしており、当然こどもたちもこれらの活動に参加しているようです。

さらに、公民館祭りがあり、普段活動しているコーラスや踊りなどのサークルの発表会や作品の展示会が行われています。この中で特に注目すべきだと感じたのが、ピアノの発表会を公民館祭りの中で実施している点です。これは、地域にあるピアノ教室と連携し、その教室が公民館の催しの一部として発表を行うというものです。通常の発表会であれば、参加者の家族や親戚、関係者だけが集まる場ですが、公民館祭りという場で地域の方々を前に発表できるのは、特別な機会になるのではないかと思います。これは公民館の活用法として非常に効果的だと感じました。さらに、そこで発表を経験したこどもの中からプロのピアニストになった方もいるそうで、今年は、そのプロになった方が公民館のために演奏会を開いてくれるということです。その方は現在大畑には住んでいませんが、大畑に貢献しようという協力も得られているとのことで、非常に有益な取組だと感じました。

青少年に関する事業は、主に二つ行われています。一つは冬季のレクリエーション大会で、カラーリングなど親子で一緒に参加できるような遊びを提供している点が特徴です。もう一つは、かなり大きな事業となりますが、大畑のねぶた祭りをこの公民館が主催しているということです。このねぶた祭りは、ねぶたの関係者から見るとかなり特殊だと感じます。まず、参加する団体は現在8団体ありますが、そのすべてが子ども会だそうです。子ども会に関わったことがある方ならお分かりかと思いますが、子ども会だけでねぶたを運行するのは、通常ではかなり難しいと考えられます。しかし、実際には囃子方も子ども会だけで担当しているようです。大人はサポートに回っているものの、子ども会が主体となって運行するねぶたが8台も出るというのは、非常に貴重な事例ではないでしょうか。実際、この地域のこどもたちのかなりの割合がこのねぶた祭りに関わっていることになり、「好きだから参加する」というよりは、「この地域に住んでいれば、その年齢になったら自然と関わるものだ」という意識が根付いているのではないかと推察されます。多くのこどもたちがこの祭りに参加することを通じて、大畑という地域を意識する仕組み、つまり、日常生活の中で自然と地域に関わるような仕組みとして、こどもたちだけで行うねぶた祭りは非常に大きな存在意義を持っているのではないかと感じました。

委員 大畑公民館は、公民館祭りとねぶたという二つの大きな行事が中心であり、その中でこどもたちと大人とのつながりが生まれ、その活動の場として公民館が存在しているという点が非常に大きいと感じました。少し行政的な話になりますが、むつ市は合

併によって市域がかなり広くなりました。しかし、それぞれの地区が持つ良さが失われつつある中でも、大畑地区は大畑としてのアイデンティティといったものが強く打ち出されているように感じます。その象徴的なものが、公民館祭りやこどもねぶたといった行事が毎年継続されていることではないかと、強く感じました。

事業を進める上での工夫として、公民館祭りは参加団体相互の交流を意識していて、親睦を深める成果につながっていると感じています。また、こどもねぶたに関しても、子ども会だけで運行するのは大変なことではありますが、周りの大人たちがしっかり支え、さらに大畑地区出身で現在むつ市の中心部に家庭を持つ親が手伝いに来るという関わりがあることで、秋の公民館祭も含め、うまく連携が取れているのではないかと感じました。

また、事業の成果という点では、こどもたちが中心となって地域の行事を担うことが、郷土への愛着や誇りを育む上で非常に重要であると感じられました。特に、学校教育のカリキュラムとしてではなく、あくまで地域の文化や風習として行事に触れる機会を通じて、こどもたちは自然にそれを受け入れたり、勝ち負けを競うわけではなくとも「うちのねぶたはすごいぞ」といったこだわりを持ったりすることが、郷土愛を育むことにつながっているのではないかと思います。

そうした中で、私が特に強調したいのは、所感の部分で触れた公民館の存在意義です。今回の諮問事項にもありますが、公民館の運営という点では、直営だからこそでできる部分もあると感じています。何でもかんでも民間に委託すれば良いというわけではなく、人材が育っていない状況でいきなり民間で運営しろと言われても、それは無理な話です。少ない職員の方々が一生懸命に運営されている様子や、施設が老朽化していく中で、防災拠点としての役割も考え、新しい施設のあり方を模索されているというお話も伺いました。やはり、公民館という存在があるからこそ、人と人、団体と団体とのつながりが生まれているのだと感じます。将来的には、周りの人々が自主的に公民館を支えていくような気持ち、その存在意義を行事を通じて育んでいくことが非常に必要だと感じました。完全に民間に管理を委託することが全てではなく、公民館が意義ある存在なのだというのを地域の人々がしっかりと認識した上で支えていく、そういった仕組みづくりが非常に重要ではないかと感じました。

会長 ありがとうございました。大畑公民館の取組に関して、皆様から何かご意見等がありますか。

今の報告から、やはり「ねぶた」という取組は素晴らしいなと感じました。そうした伝統行事を公民館が担い、その活動を通してこどもを「教育する」というよりも、こどもが自然と「育っていく」、地域の担い手が形成されていく様子がよく見える取組だと思いました。この点は、答申をまとめていく上でも重要な核心部分になるのではないかと感じながら聞いていました。

続きまして、青森市立千刈小学校PTAの取組についてです。よろしくお願ひします。

委員 千刈小学校のPTA活動は、単なるPTA活動にとどまらず、地域を巻き込み、コ

コミュニティスクールを核として、古川小学校、古川中学校、さらには市民センターをも巻き込んだ大きな地域のうねりとなっている点に、際立った特徴があるかと思います。諮問の「こどもたちの主体的な地域活動」「地域に根付いた持続可能な取組」という観点において、非常に突出した事例でした。活動の核となっている棟方さんのお話が本当に魅力的で、あっという間に時間が過ぎてしまったと感じています。

まず、事業の概要です。資料の通り、SDGsに沿った取組や、今学校に必要なと思われる取組、あるいは地域の困りごとに着手するなど、特定の活動に固執するのではなく、楽しそうで、かつ必要とされていることを次々と実践しているという印象でした。多くの学校では、PTAは学校が主体でその手伝いをする、あるいはさせられているという感覚が否めず、最近ではPTAから脱退する流れも見られます。しかし、この地区のPTAでは、加入しないという人はほとんどいないとのことでした。完全に自走している状態で、独立性も高く、小学校内に一部屋を活動拠点として提供してもらい、広報誌もすべて自分たちで制作しているとのことでした。

事業の成果は3点に集約されるかと思います。第一に、こどもたちに出番を作り、その中で彼らの成長を見守っていること。第二に、地域の人々、つまり保護者から見て、こどもたちが当事者として自己決定をし、学校や地域を支える存在へと成長していること。そして第三に、こうした活動で常に課題となる持続可能性について、「できる人が、できる時に、楽しく」という発想で、負担感のない新しい形のPTA活動が確実に築かれている点です。

最後に所感ですが、とにかく棟方さんが魅力的でした。無理をせず、ご自身が楽しみながら、明確なビジョンを持って地域づくりを行っています。人々を巻き込む力、新たな発想力、そして、地域の人々に寄せる信頼感、そのどれもが非常に突出していました。しかし同時に、棟方さんがいなければ成り立たない活動を目指しているわけではなく、持続可能な形を模索している点も素晴らしいですし、実際に後継者も育っている状態です。地域に必ず存在する小学校を核として地域を創っていくという手法は、非常に有効なのだろうと思いました。小学校という場でそうした体験をしたこどもたちが、やがて大人になり、次の世代のこどもたちを育てる側になる。そして、こどもたちのより良い活動のために地域の人々が協力する。その中心に小学校があるという形で、当事者意識を持った地域と関わる人材を育てている、素晴らしい活動だと感じました。

会長 ありがとうございます。今回、棟方さんの話を伺い、PTAの価値を再発見したと改めて思いました。例えば、市P連のねぶたの取組についても話を伺ったのですが、台上げや台組みといった、こどもにとっては少し危険な作業も、あえて一緒に見せるのだそうです。その中で、親が地域で生き生きと活躍している姿をこどもが目の当たりにする、そういった機会を作ることが大切だというお話でした。また、市P連のねぶたを存続させるかどうかという議論の際には、「崖っぷちねぶた」というインパクトのあるタイトルをつけ、その決定をこどもたちにも委ねていく。そういった姿勢も非常に重要な点だと感じました。諮問事項の2「こどもたちの主体的な地域活動をどう作っていくか」という点において、この棟方さんのこどもへの関わり方は、本当に大

きなヒントになるのではないかと思います。

では、今の千刈小学校PTAの取組に関して、ご質問や確認事項等がありますか。
よろしいでしょうか。

5番目は、「あおり若者プロジェクトクリエイト」の取組です。委員からの報告をお願いします。

委員 私からは、青森市で活動されている、若者が主体となった地域づくり団体「あおり若者プロジェクトクリエイト」についてです。この団体は、代表の方が高校生の時に立ち上げたもので、現在も高校生を対象に、1年間をかけて約30人の若者たちが街を学校に見立てて主体的に活動しているとのことでした。主な活動はワークショップ形式で、最終的には成果発表会を行うという形で1年間活動されているそうです。

事業を進める上での工夫として、大きな特徴は「クラス制度」を導入している点です。商店主の方々に「担任」、まち塾の運営に携わる大学生を「副担任」として、三位一体となり、商店街をフィールドとして活動しているそうです。

連携については、地域の様々な方々にお願いをして協力を得ているとのことで、青森市や駅ビル、学校などとも連携し、場所の提供や補助金の支援、イベント講師の派遣などを行っているそうです。

広報活動としては、チラシやラジオ放送などで周知を図っているそうですが、最も効果を上げているのは高校生同士の口コミだということでした。

事業の成果については、参加者には都内の大学に進学しても地元に戻って就職を希望する子どもが多いというお話でした。実際にアンケートを取って集計してみたが、まだ実施には至っていないとのことで、今後それも課題として取り組んでいきたいと語っていました。

事業の課題としては、他の多くの団体と同様に、現在は補助金に頼った運営をされているため、いつ補助金が打ち切られてしまうかという不安があるとのことでした。また、後継者の問題として、代表の方は現在、東京から通って活動を続けているそうですが、担い手を育てたいと考えているものの、かつての参加者である高校生たちが就職し、中には医師になった方もいるそうですが、多忙のためなかなか後継者が見つからないのが課題だということでした。

参加人数は、毎年30人くらいで、定員を超えた場合でも受け入れているとのことでした。担い手については、できれば他の方に代わってもらいたいという思いはあるものの、かつての参加者が成長し、いずれ自分の後を継いでくれるように、現在取組を進めているとのことでした。その中で少し気になった点として、参加している大学生と高校生との関わりの中で、ストレスを感じて辞めてしまう高校生もいるそうで、相談の機会を多く設けるなどして、そうした問題も解決していきたいというお話が印象に残っています。

今後の展望としては、代表の方が東京在住のため、今後は地元のメンバーだけで運営を回せるようにしていきたい、そして地元で活動を仕切れる人がもっといれば助かるとのことでした。

全体を通しての所感ですが、若いうちに地域と触れ合い、自然に関わっていくこと

によって地域愛が生まれ、将来にわたって地域を支える人材になりたいという気持ちが芽生えることが多いのではないかと感じました。また、後継者を育てるというよりも、その時々の方が代表者が一代限りで務めていくという考え方が、現状では多いのかもしれないという印象を受けました。

会長 ありがとうございます。ただ今の「クリエイト」の取組について、何か確認事項等がありますか。よろしいですか。

今のお話を伺いながら、この取組は、こどもや若者をきちんと町の主人公として位置づけ、まちづくり活動を通じて、こどもたちが町の中で育っていく、そうした仕掛けや仕組みを作り、動かしている活動なのだなということが、改めてよく分かりました。ありがとうございます。

次は、青森市の「東部市民センター」の取組です。こちらは事務局から報告をお願いします。

事務局 青森市東部市民センターについて、お二人の委員から提出された調査シートを基に説明します。

事業の概要ですが、市民センターという枠を超え、地域のハブとも呼べる活動を展開している。単なる施設運営にとどまらず、積極的に新しいアイデアを取り入れ、地域住民一人ひとりの生活に寄り添う活動をしている様子が好印象だった、とのことでした。

事業を進める上での工夫としては、参加者の希望日や内容、地域のニーズに合わせて事業を展開しているそうです。例えば、日曜日に小学校低学年向けの親子参加型講座を設けたところ、参加者が増加したとのことでした。また、利用者の声を直接聞くために、利用者懇談会やサークル懇談会などを開催しているそうです。

連携については、町内会や地域の団体と協力して行事を実施しており、町会、高校、小学校、寿大学など、様々な組織と連携を図っているそうです。

広報活動に関しては、「市民センターだより」を毎月発行し、地域回覧や口コミも活用しており、定期的な情報発信が有効だと感じたとのことでした。この「東部市民センターだより」は月1回作成され、近隣の850世帯、40事業所に配布されているほか、近所のコンビニなどにも置かせてもらっているそうです。また、地域の全児童が持ち帰る「キッズ新聞」の効果は特に高いとのことでした。市内のこども向け事業については、PTAや学校向けのSNSも活用して宣伝していて、PTAが会議等で施設を利用した際には、イベントの告知をさせてもらうなどの工夫もされているようです。

成果としては、最近、地元のこどもたちの参加が顕著に増えていて、広報や周知の成果が現れているとのことでした。年間で約65事業、100回の催しを実施していて、これは協定内容の倍近い数にあたり、人気で抽選となる講座も生まれているそうです。また、講座やイベントへの参加満足度も高まっているとのことでした。

課題としては、やはり人材不足が深刻で、臨機応変に施設利用者に対応できる若い世代のスタッフが不足していて、館長に過度の負担が集中しているのではないかと懸念が示されています。

参加者の感想や推移ですが、講師への謝礼だけでなく、写真入りの礼状や季節の手紙を送るなど、きめ細やかな対応をすることで、講師からも「また協力したい」と思ってもらえることが、活動の活発化につながっているとのこと。また、地域の実行委員会や民間企業との関係を強化することで、さらなる参加者数の増加を見込んでいるということです。

担い手の育成・確保については、やはり若い世代や地域の新しい人材を巻き込み、計画的に担い手を育成していく必要があるとのこと。ボランティアや地域リーダーの発掘、研修制度などを整えることが求められているのではないかと、また、地域おこし協力隊などを活用する方法も検討できるのではないかと述べられています。

今後の展望としては、デジタル技術やSNSを活用した広報を強化することで、より幅広い世代への参加を促すことができるのではないかと考えているそうです。低学年対象のプログラムは参加率が良く、親と一緒に祖父母も参加することがあり、世代間交流の場にもなっているとのこと。今後はさらにこども向け・青少年事業に力を入れていきたいと考えていて、共働き世代に向けて夕方や夜、土日に参加できる事業も拡充したいとのこと。また、学校の休業期間中に学習室を提供し、地域児童の学習支援にも力を入れたいという意向が示されています。

所感ですが、地域の実情に根差した多様な企画は、他の地域にとっても参考になる取組だと感じた、とあります。ただ一方で、館長の強いリーダーシップに依存している面があり、次世代の人材育成や財源の確保などが急務である、とも指摘されています。また、館長が地域のため、未来のこどもたちのために熱心に取り組んでいるのが印象的だったが、ほぼ全てを館長自らが担っている様子であり、館長が交代してもセンターを維持できるのか心配になった、そして、社会教育施設や団体の活躍は、キーパーソンによって決まりがちだと感じた、とまとめられていました。

会長 ありがとうございます。ただ今の「東部市民センター」に関する報告について、何か確認事項はありますか。よろしいですか。

地域の方々の声を丁寧に聞き、それを受け止めて公民館や市民センターの事業を展開していくという点や、公民館が地域の様々な機関や団体を繋ぐ「ハブ」の役割をきちんと担っているという点は、非常に重要なポイントであり、今回の調査で共通して見えてきたことかと思います。また、市民センターとして「キッズ新聞」を発行している点も特筆すべきことだと思いました。公民館が地域住民向けにお便りを出すことはよくありますが、それをこども向けにも作成しているという点は、本当に大切な取組をなされているという印象を持ちました。ありがとうございます。

次は「細谷おらほの寺子屋」についてです。報告をお願いします。

委員 三沢市の「細谷おらほの寺子屋」について報告します。「寺子屋」と聞くと、私はこどものための場所というイメージがありましたが、この三沢市の寺子屋は、介護予防事業とのことでした。細谷という地区は三沢市内でも北部に位置する非常に小さな集落で、今回お話を伺った方が、ご自身のこどもを連れてその集会場に行き、介護予防事業を手伝うようになったのが活動の始まりだったそうです。ご自身のこども時代と

比べて、子ども会活動がなくなったり、規模が縮小したりしていく現状を目の当たりにし、こどもの数は少ないけれども、この地元でこどもたちと連携しながら活動を広げていきたいという思いから始まったものでした。

事業の工夫としては、これが住民主体の活動であり、お話を伺った方自身が参加者であり運営者でもあるため、高齢者とこどもが互いに利益を得られる「ウィンウィン」な活動にしたいと考えているとのことでした。また、高齢者が「また来たい」と思えるような場所にすること、そしてこどもの参加は親の意向に左右されるため、親にも参加してもらい、理解を得られるような活動にすることを目指しているとのことでした。

連携については、近隣に誘致企業があり、そこの外国人技能実習生も巻き込んだ事業を展開しています。また、財政面では、様々な財団や地域企業からの助成金、そして市からの補助金などを活用して運営しているということです。

広報活動は、回覧板が中心ですが、それがなかなか各家庭に回らないという課題に対応するため、ウェブ上で閲覧できる仕組みやLINEの機能を活用して情報を発信しているとのことでした。さらに、高齢者向けの取組にはなりますが、新しいことを始める際には必ずメディアを呼び、新聞に掲載してもらうなど、積極的な広報を行っているそうです。その記事の主な内容は高齢者の活動ですが、こどもたちも一緒に参加している様子が映し出されています。

成果としては、こどもたちが活動に参加することで、高齢者の方々にとても可愛がってもらえたり、地域を歩いていると声をかけてもらえたりすることで、自己肯定感が高まっているとのことでした。高齢者の方々はもちろん、自分の活動が認められ、新聞やテレビに取り上げられると非常に喜び、活動への意欲が高まるそうです。

課題としては、やはりこどもが少なくなっている点が挙げられます。現在、2世帯しかこどもが参加している世帯がないということで、活動の継続が難しい状況です。また、先ほど申し上げたように、現代のこどもは塾や習い事など色々と忙しいため、活動に参加するには親の理解が不可欠であり、そこで参加に差が出てしまうという問題があります。これほど良い活動をしているので、何とか定着できれば良いのにと感じました。そして、やはり補助金の問題があり、補助金が途切れたらこの活動がどうなるのかという懸念も口にされていました。

担い手の育成については、これまでの事例と同様に、中心となる方がいるからこそ成り立っているという側面が強く、新たな担い手を育成するのはなかなか難しいのではないかと感じました。この方は、高齢者の方々を活動の中心に据え、様々な行事に巻き込みながら、友人や地域の人々、町内会の役員などを含めて活動を展開しています。本人は「自分は前に出ずに、そうした人たちを育てている」と話していましたが、支援の対象となっている方々が高齢者であるため、その点が今後の継続性においてどうなるのか、何か良い方法はないものかと感じました。

感想ですが、この取組は高齢者が主体であり、その活動にこどもたちを繋げているという点が特徴的でした。そして、行政サイドがどのように関わっていくべきか、また、今回の諮問内容であるこどもや公民館といったテーマとこの活動をどう結びつけて考えていけば良いのか、という点が今後の検討ポイントだと感じました。もう一つ

は、やはり人材の発掘です。活動の場を作ったり、活動に賛同する人を募ったり、活動を広げていったりするためには、どうすれば良いのか。私にはC S（コミュニティ・スクール）との連携くらいしか思いつきませんが、こうした課題が解決できれば、もっと活動を繋ぎ、持続可能なものにしていけるのではないかと、いわゆるSDG sの考え方に沿った活動になるのではないかと思います。

会長 ありがとうございました。何か補足等がありますか。

委員 特に印象に残ったのは、代表の中村さんが「ゼロから何かを創り上げるのは本当に大変だ」とおっしゃっていたことです。しかし、既存の寺子屋の活動にこどもたちを関わらせることで、ゼロからでは難しいことも実現できるのだと話していました。そして、こどもたちに「ふるさとがあるということは、心をととても豊かにすることなんだよ」と伝えていきたいという思いでこの活動を始められたそうです。中村さんが、最初に手がけていたのはこどもを中心とした地域おこし活動だったのですが、それを一旦休止し、この寺子屋を始めて、そこにこどもたちの活動を組み合わせていくという形で立ち上げられたとのことでした。そうした人材をどうすれば育成できるのかと質問したところ、「自分自身がこの地域に育ててもらった」と話していました。常に学び続けていて、自費で研修に参加することもあるそうです。そして、「県などが、年に一度でも良いから、私たちのような活動をしている人々を表彰するような制度を作ってくれたら、もっとがんばれるのではないかと話していたのが、非常に印象に残りました。

会長 ありがとうございます。地域の介護予防事業にこどもたちを参加させ、交流の場を創出するという取組でした。例えば、全国的にも青森県内でも、どこの公民館でも高齢者向けの事業は数多く行われています。そうした既存の事業に、意識的にこどもたちを巻き込んでいく、繋げていくという視点は、この三沢市の事例から大いに学ぶことができるのではないかと感じていました。ありがとうございます。

次は、中泊町の「集落支援制度」についてです。報告をお願いします。

委員 今回お話を伺ったのは、役場の総合戦略課でこの事業を担当されている木村さんです。集落支援制度とは、国の制度であり、集落に「支援員」を配置し、その支援員が役場と住民との間に入って様々な連携を図っていく、というのが大まかな内容です。財源は国から支出されるため、町の負担はないというものになります。中泊町では、地域の課題解決力を向上させることを目指し、集落が自らあるべき姿をイメージしながら実践していくための担い手として集落支援員を位置づけました。そして、地域の人々が課題解決能力を身につけてほしいという思いから、そのハブとなる人材として集落支援員を採用したという経緯があります。中泊町は、中里町と小泊村が合併してできた町で、間に五所川原市が挟まっているため飛び地になっており、地理的な不便さがあります。そのため、当初はそれぞれの地域に集落支援員を配置しました。この制度には「専任集落支援員」と「兼任集落支援員」の二種類があり、中泊町では最初

に役場が採用した専任の集落支援員を2名配置しました。彼らは数年間活動し、集落の課題を出し合って解決策を探るための「集落点検」を実施したり、一軒一軒を訪問して様子を聞いたり、空き家の状況を確認したり、一人暮らし世帯の状況把握や見守り活動などを行ったりして、一定の成果を上げていました。しかし、活動を進める中で、住民の方から「あなたは役場から仕事として来ているプロなのだから、あなたがやってくれ」という、受け身の姿勢がどうしても抜けきれないという課題がありました。

成果は確かにあったものの、町としては、これは自分たちが思い描いていた姿ではないということで、兼任集落支援員制度へと切り替えることにしました。中泊町では、兼任集落支援員に対して、特定の誰か一人に人件費として40万円を支払って活動してもらうのではなく、元々あった各町内会に40万円を配布するという解釈で制度を運用することにしました。つまり、町内会の既存の会費に、国からの交付金40万円が上乗せされる形になります。そして、「この40万円の使い道をみんなで考えてください」という形にしたのです。この方法は非常に効果的だったようです。誰かがやってくれるのを待つのではなく、突如として生まれたこのお金を前にして、皆が自分たちの町内会のことを「自分ごと」として捉え、「ゴミステーションが古くなったから新しくしたいね」とか、「なくなってしまったお祭りを復活させたいね」とか、「もちつき大会をしたいね」といったように、主体的に考えるきっかけになったそうです。

その結果、成果は着実に現れてきています。兼任集落支援員制度を導入した初年度の令和3年度には、全41町内のうち13町内が参加しましたが、令和7年度には33町内が参加する見込みとなっており、年々参加団体が確実に増えていることから、その成果が伺えます。

課題としては、全町内会の参加を最終目標としているため、残りの8町内をどうやって巻き込んでいくかが現在の課題だということです。この8地区は、町営住宅が多いという特徴があります。町営住宅では人の出入りが激しく、短期的に居住する人が多いため、地域に根付く人が少なく、コミュニティが形成されにくいという問題があります。また、中には町内会自体が存在しない地区もあり、この支援制度を導入する上での根本的な受け皿がないという状況もあるため、そこをいかに巻き込んでいくかが課題であるとのことでした。

担い手に関しては、特に担い手を育成しようという意図はなかったそうですが、自分たちの頭で自分たちの地区のことを考えるという経験を通して、自然と「皆が担い手である」という意識が少しずつ浸透してきているのだなと感じ、大変良い成果が出ているのではないかと思います。

今後の展望としては、中泊町は元々、小規模ながらも様々な機能を持った住民自治の仕組みである「小規模多機能自治」を目指しており、その一環として集落支援員制度を導入した経緯があります。兼任集落支援員制度において、40万円という予算の使い道を地域住民が自分たちで考えることは、町が目指す小規模多機能自治の礎になると予想しています。兼任集落支援員を中核として、住民が主体となって様々な取組を実施する中で、住民一人ひとりの力を発揮する仕組みや、単なる「参加」だけでなく、企画段階から関わる「参画」に繋がる仕組みを構築していくことで、生まれ育った地

域での「あずましい（心地よい）暮らし」を守り、持続可能な地域づくりを目指しているとのことでした。この「小規模多機能自治」という言葉が、中泊町の大きなスローガンであり、今後の指針でもあったと感じました。

所感ですが、最も印象的だったのは、担当の木村さんが、非常に楽しそうに話をしていたことです。その様子から、この取組が成功しているのだなということが、話を聞いている段階で伝わってきました。木村さんは、ご自身も地元の住民であり、担当になる前からこの兼任集落支援員制度が始まった町内で、「自分たちの町をどうしようか」という議論に個人として参加し、実際に大きなお祭りを企画したり、自分たちの地域だけのお祭りを隣の町内と連携させて5町内合同の大きなお祭りに発展させたりといった経験をされていたそうです。住民としてまずこの制度を素晴らしいと感じていて、さらに担当者にもなったということで、仕事の上でもこの取組を非常に「自分ごと」として捉えていることが感じられ、そこが最も素晴らしい点だと思いました。また、これを実現するにあたっては、町長が強いリーダーシップを発揮し、「これをやっていくんだ」というビジョンを町民に共有したそうです。前任の担当者の方などは大変なご苦労もあったようですが、そのビジョンに引かれ、実現に向けて尽力し、その熱意が町民に伝わる仕組みも構築されている。まさに、暮らしというものを、行政と住民が両輪となって創り上げていくことの強さを強く感じた視察でした。

会長 ありがとうございます。中泊町の「集落支援員制度」に関して、何か確認事項等がありますか。

委員 どの町にもある一般的な町内会の活動とは、何か違いがありますか。

委員 前提として、私自身がスタンダードな町内会の活動をあまりよく分かっていない世代であるという点をご承知おきください。その上で、私の個人的な所感としては、予算が与えられ、その使い方を自分たちで考えるという、一種の経営的な視点が重要なのではないかと感じました。もちろん、通常の町内会も会費を集めて運営しているので、同様の経営的な側面はあると思います。しかし、言い方が悪いかもしれませんが、ぽっと与えられた40万円という金額が強い動機付けになっているように思います。自分たちで集めたお金で何かをすることももちろん大事ですが、急に使えるお金が増えたとなると、それを無駄にせず、せっかくだから有効に使いたいという気持ちが働くのではないのでしょうか。これまでは「こういうことをやりたい」と思っても、「じゃあ、そのお金は誰が出すのか」と言われてしまえば、負担に感じて言い出せなかった人々が一定数いたはずです。その人たちにとって、この40万円という予算は非常に効果的で、予算がついたことでアイデアを自由に言える環境ができたという点が、この取組独自の特徴なのではないかと感じました。

会長 ありがとうございます。中泊町では、集落支援員制度をてこにして、自治を創り出していく、つまり地域に自治の土壌を耕していくような動きが見られるということです。そして、40万円などを活用した自治的な取組の中に、こどもたちも巻き込み、一

緒に活動していくという流れが生まれつつあるのではないかと感じました。

(休憩)

会長 前半に続いて、野辺地町の「ふるさと学習」について報告をお願いします。

委員 この取組は、平成 30 年に野辺地町が北前船の寄港地として認定されたことをきっかけに、歴史民俗資料館の職員が何かできないかと考え、動き始めたものです。連携の面では、歴史民俗資料館が母体となり、町ぐるみで進められているという点に面白さがあります。また、対象が幼児教育から高等学校までと幅広い点も特徴です。幼児教育施設も減少している中で、地域全体でこどもや若者を育てるという軸を共有し、実現されている取組なのだと思います。

特徴としては、野辺地町にある「もの」を生かしていること、そして「実体験」を非常に重視していることが挙げられます。実体験を通じて、こどもたちや同行した教員から出た意見や感想を活かし、「もっと面白くするにはどうすればよいか」「その意見に応えるにはどうすればよいか」という形で、企画が常にアップデートされているのだと感じました。話を伺っている際も、歴史民俗資料館の担当者の方が楽しそうに話されていたのが印象的で、そうした「楽しみながらやっている」という姿勢が、この活動のポイントなのだろうと思います。

調査の後、8 月 14 日のニュースでも報じられていましたが、野辺地町、鰺ヶ沢町、深浦町を巡ると、それぞれの場所で絵馬がもらえ、3つ揃うとアクリルスタンドがもらえるという企画も行われています。何かを集めて形として残る体験や、本気で調べようと思えばいくらでも掘り下げられる仕組みは、こどもたちにとって魅力的です。身近なものの面白さや、その楽しみ方、広げ方、深め方を、先生や親以外の大人たちが関わって伝えていく。そしてそれは、小学校からでも、保育年代からでも、中学校や高校からでも、どの段階からでも可能なのだということが形として示されているのが非常に印象的でした。

こうした活動の成果がどの程度で現れてくるかという点ですが、ふるさと学習の最初の事業が始まってから、おおむね 10 年以上が経過しています。そのため、現在のこどもたちの保護者が、このふるさと学習を経験した世代になってくる時期がこれから訪れます。その時に、保護者たちがこの活動にどのように関わってくるのかという点が、一つの成果を見極める、あるいは、もし変えるべき部分があるならば、そこからまた変えていくべきポイントになるのだろうと感じました。

とにかく、関わっている小学校の先生方、教育長、そして歴史民俗資料館の職員の方、どなたも話したいことが非常に多く、熱意にあふれた時間でした。このように、キーパーソンたちが「話したいことがたくさんある」「自分たちでどんどん新しいものを創り出している」「その過程に他の人々を巻き込んでいく」というスタンスを持っていることが、非常に重要だったのだな、そして重要であり続けるのだろうなと感じました。

会長 ありがとうございました。野辺地町の「ふるさと学習」には素晴らしい点が多々あると感じますが、とりわけ、こども、つまり幼稚園・保育園児から小・中学生、高校生、そして大人までを対象とした総合性のある「ふるさと学習」が、計画に基づいて一体的、総合的に行われている点は、学ぶべき点が非常に多いと感じました。

続いて、青森市の「レスタ」の取組について、報告をお願いします。

委員 「レスタ」は、2012年に青森公立大学の学生を中心に立ち上げられた、大学間の連携サークルです。公立大学の学生が中心軸とはなっていますが、他の大学の学生や高校生も参加していて、かつては総合社会教育センターなどで寺子屋活動も行っていたとのこと。その後も様々な形で活動を継続しており、主な活動内容は、寺子屋、異業種交流イベント、高校生の活動支援、研修・勉強会、そしてレクリエーションの5つです。また、年に1回ワールドカフェ形式のイベントも開催していて、これらを活動の軸としています。メンバーの内訳は、公立大学の学生が5名、中央学院大学が1名、青森中央短期大学が1名、弘前大学が2名、そしてインタビューに答えてくれた学生が所属する京都橘大学が1名という構成です。

この活動は、元々こどもたちの成長に必要な自由な時間や、自分たちで創り上げていく場所、遊び方、過ごし方といった「余白」が少なくなっているという問題意識から、そうした機能を果たせる場所や時間を提供できないかという考えで始まったものです。それから10年が経過し、現状はどうかというと、なかなか厳しい状況にあると感じながら話を聞いていました。活動している学生たちにとっても、やるべきことは5つの柱として定まっており、それぞれに担当者と副担当者を置いて運営し、そこに参加している高校生が「今度は私がやってみたい」と手を挙げるなど、循環の仕組みはあるものの、その輪の活力がかつてと比べて低下してきたり、個々の活動の参加者数が減少したり、伸び悩んだりしている状況です。今後どうしていきべきか、何とか活動を維持・継続していきたいが、その方策に苦慮している様子でした。いわゆる、「楽しんで、盛り上げて、広げていこう」という勢いは、今のところはなかなかない、あるいは持ちにくい状況にあるのではないかと感じられ、その点が逆に参考になる部分ではないかと思いました。

やはり、やる事が固定化してくると、どうしても「その決まったことをどうこなすか」という点に意識が向きがちになり、活動そのものに対する主体性は高まりにくくなるのではないかと思います。そうした中でも、主体性を持って取り組んでいる、あるいは取り組もうとしていると感じられたのが、企画力、つまり活動の中身を企画する力や、決まった活動内容の中で自分のオリジナリティを発揮するデザイン力といった部分です。そうした、自分らしさを発揮できる部分を軸にして主体性を保ち、ここからもう一度立て直そうという意欲があるのではないかと感じています。

かなり苦戦している様子ですが、今年度はその状況を打開し、上向きになる兆しがあるようです。拠点がなくなったことで市民センターを利用するようになったことが、逆に新たな取組の可能性に繋がっていくのではないかと感じました。いかにして大学生の新規メンバーを増やしていけるかが、今後の課題だと感じています。

会長 ありがとうございました。「レスタ」の報告に関して、何か確認事項等がありますか。
よろしいですか。

最後に、「田舎館村中央公民館」の取組についてです。報告をお願いします。

委員 田舎館村の中央公民館では様々な取組が行われていますが、ここでは「村民レクリエーション祭り」と「ねふたの合同運行」を中心に話します。

「村民レクリエーション祭り」は、村民の体力づくりと住民相互の親睦を図ることを目的としており、ユニカールやスポーツチャンバラ、バスケットボールなどが実施されています。「ねふたの合同運行」は、年に一度、道の駅に各地域で制作した山車を集め、一緒に運行するというイベントです。それぞれの地域でも運行は行われていますが、そうした合同運行が実施されています。

「村民レクリエーション祭り」は、元々「村民運動会」だったという歴史がありました。コロナ禍以前から参加者が徐々に減少していましたが、形を変えても続けたいという声があり、現在のように、参加したい地区が希望する種目を選んで自由に参加できる「祭り」形式になったとのこと。村民が一堂に会するというのが、村民運動会の元々の目的だったと思いますが、任意参加ではあるものの、村民が参加できる場が確保されているというのは、貴重なことではないかと思います。

また、イルミネーション事業においても、保育園児や中学生などが様々に関わりながら、ふるさとに誇りを持ってもらうための事業を展開しているとのこと。

ねふたの合同運行に関しても、こども園をはじめ、様々な地域の方々が参加しています。先ほどの大畑の事例と共通する部分もありますが、集落ごとの参加度合いや、大人とこどものつながりには濃淡があるものの、そうした中で何とか継続してきている状況です。

参加者の感想や推移についてですが、ねふたの合同運行には12団体が参加していますが、参加しない団体もあるとのこと。高校生の参加もあり、それがふるさとを愛する気持ちにつながっているものと考えられています。また、「未来のリーダーを育てる研修会」というものも実施されていますが、こちらは参加者集めに苦労されているとのこと、次世代の人材をどう育成していくかという点では、なかなか大変な状況があるという話でした。

今後の展望や取り組みたいこととして、「垂柳遺跡」と「獅子踊り」という二つのキーワードが出てきました。垂柳遺跡は弥生時代の稲作跡として知られており、そうした歴史的な遺産をしっかりと教育の中で活用していきたいという話がありました。また、獅子踊りについても、職員の方とのやり取りの中で、これも活用できるのではないかという話が出たそうです。そうした伝統芸能の継承が大きな課題であり、SNSを通じて参加を呼びかけるといった試みもしているとのこと。

公民館が中心となって地域の人々を繋いでいくという存在意義が、非常にあると感じました。先ほどの中泊町の木村さんの事例とも共通するのですが、職員の方が非常に深く地域の中に入り込み、「ここにはこういう資源があるよね」とか、「この活動に参加してみてこんな課題があるよね」といったことを当事者意識を持って捉えている点が、非常に大きいと感じました。公が深く関与し、公民館という場で様々な事業を

組み立てて実行している。確かに、予算的な課題などこれから直面するであろう困難はあるかと思います。しかし、そうした中で職員の方が当事者意識を持ち、地域の方々と上手く連携しながら活動している。田舎館村では、突出したキーパーソンという存在はなかなか見当たらないという話でしたが、その分、関わっている職員の方々が、地域の一員として当事者意識を持ちながら地域の活動を盛り上げている、そうした動線ができてるように感じました。その点は、これからの公民館のあり方と、地域をどう盛り上げていくかという課題に、深く繋がってくる話ではないかと感じました。

会長 ありがとうございます。「田舎館村中央公民館」に関して、何か確認事項等がありますか。よろしいですか。

11 件の実地調査についての報告をしていただきました。皆様の報告を聞きながら、この 11 の事例はすべて青森県内の取組ですが、地域を丁寧に見つめてみると、本当に大切に素敵な取組が数多く、豊かに存在しているのだなということを改めて実感させられました。是非、今回のこの実地調査から得られた知見、皆様が報告書にまとめてくださった文章や、本日ご発言いただいた内容、それらのエッセンスをうまく抽出しながら、答申の骨子、そしてその中身へと繋げていきたいと考えています。ありがとうございました。

続けて案件（２）に進みたいと思います。案件（２）は、審議事項に関わる答申の骨子案についての議論です。諮問書を改めてご確認いただければと思います。我々は、「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくり」という目標を念頭に置きながら、ここに示された３つの諮問事項について審議を進めているところです。この３つの事項はそれぞれ個別に議論するのではなく、まず１を基礎として２を検討し、そして１と２を基礎として３を検討するという順序で進めることになっています。そのため、答申の骨子案を検討するにあたって、まずは審議事項の１「公民館等の社会教育施設におけるこどもたちの継続的な地域学習の推進について」、ここから議論を始めていきたいと思います。この１番目の諮問事項については、例えば「幼少期からの年代に応じた地域学習の進め方」や、「こどもたちの地域愛を育むための方策」、「地域の大人たちの学び・活動の成果をこどもの地域学習に活かすための方策」という視点もきちんと持ちながら、答申をまとめていきたいと考えています。

まずは、１番目の諮問事項に関して、「このような項目を盛り込むべきではないか」、あるいは、「今回の実地調査などを通じて、このような内容をぜひ盛り込みたい」、という意見がありましたら、皆様からどんどん出していただければと思います。いかがですか。では、お願いします。

委員 概念的なことよりも、人材育成と資金の問題をきちんと皆で考えていかなければならないと感じました。県がどうかしてくれるというのを待つのではなく、自主財源を確保する仕組みや、クラウドファンディングの活用など、この豊かな活動を守り続けていくためには、やはり「人」と「お金」が重要なのではないかと思います。

会長 ありがとうございます。諮問事項１に当然関わってきますし、諮問事項３「仕組み

づくり」という点においても核となる、非常に重要な視点かと思います。
その他、いかがですか。

委員 特に公民館に関して、人材育成と資金という観点から、その運営の仕方を考える必要があると思います。例えば、直営で運営している施設があったり、大畑公民館のように市の職員が兼務で担当していて非常に大変な状況があったりします。一方で、青森市の東部市民センターのように、地域運営協議会に移管され、運営費用で非常に苦労しているという実態もあります。やはり運営主体について考えることは重要です。東部市民センターの報告にもあったように、館長さんが大変なご苦労をされているという現実があり、そのあたりをどう改善していくべきかという点は、非常に重要な視点です。何でも民間に移管すれば良いと言い切れるものではないと思いますし、公民館の存在意義を考える上で、人材育成と資金という二点は、まさにシンプルかつ極めて重要な視点であり、答申の中でも触れておくべきではないかと感じます。

会長 ありがとうございます。現在公民館の再編が進行している状況の中で、その運営の仕組みをどう整えていくのか、また、どのように機能強化を図っていくのか。これは、諮問事項1と3の両方に関わる重要な論点であると思います。
他にはいかがですか。

委員 私が話を伺った方々が、いずれも素晴らしいスペシャリストの方々ばかりだったということもあり、その意味でも「人」の重要性を痛感しました。「細谷おらほの寺子屋」の事例で話を伺った方が話されていたように、自分たちの活動を認めてもらいたい、そしてもっと広げていきたいという思いを感じました。活動する人々が、単なる自己満足や身を粉にして働くということだけでなく、周りからも認められることで、より意欲的になれるような仕組みが何かあれば良いと感じました。また、活動を発信する何らかの媒体があればと思います。これは公民館の活動に限らず、すべての活動に言えることですが、自分たちがやっていることが、もっと市民や地域の人々にきちんと浸透していくための、何か良い方法はないものかと常に感じています。具体的な提案ができず申し訳ないのですが、そういった視点を何か盛り込むことができればと、強く感じました。

会長 ありがとうございます。実地調査でも見えてきたように、青森県内には素晴らしい取組が地域に数多く存在しています。それらがもっと多くの人々に知られ、「これは大切な活動だ」という認識が広がり、活動の輪がさらに拡大していく。そうした流れを作り出すための支援のあり方について、考えていく必要性を感じました。
他にいかがですか。

委員 全体を通して感じたのは、SNSの活用がまだまだ足りていないのではないかとこの点です。特にこどもたちや、その親、つまり幼い子を持つ親の世代は、ほぼSNSの影響を強く受けています。ですから、ここでの情報発信をかなり強化していかない

と、情報が届かない、あるいは、活動が楽しそうだと思ってもらえないのではと感じました。実際に参加すれば楽しいのですが、その手前の段階で興味を引くことが重要です。公的な組織がSNSで発信すると、どうしても事務的な内容になりがちです。しかし、SNSはそれとは全く異なる価値観で動いています。必要な情報が多少抜けていても構わないので、ぱっと目を引くような投稿が必要です。また、発信する側も、ただ一方的に情報を流すのではなく、対象となるこどもたちや若い親世代に対して影響力のある人が発信すると、その情報は様々な場所に届きます。同じような属性や価値観を持つ、特に影響力のある人、先ほどから話題に上がっているキーパーソンのような人が発信すると、その情報は自動的にフォロワーのタイムラインに届きます。例えばその投稿がじっくり読まれなくても、何度も目の片隅を通り過ぎることで、どこかで認識が強まったり、心の中にその事業のことが残ったりします。発信する側が高齢の方の場合、イメージが湧きにくいということもあるかもしれませんが、そうした媒体を活用して浸透させていかなければ、本来対象とすべき人々へのアプローチは難しく、せっかくの活動がなかなか伝わらないという状況に陥ってしまうのではないかと思います。

会長 どうもありがとうございます。情報発信に関わっての提言でした。他にいかがですか。

委員 各取組において、やはりキーパーソンの存在が重要だという話が出ていますが、問題は、ごく普通のキーパーソンではない人が、どうすればキーパーソンになりやすくなるか、つまり「ゼロからイチ」を生み出せる存在になり得るか、という点だと思います。誰もが、地域に暮らし、仕事をし、何らかの余暇や役割を持って生活しています。そうした日常の中で、どうすれば問題意識や悩みを、裏を返せば「夢」として発信できるようになるか。その際に、SNSは非常に重要なツールだと思います。SNSなどを活用して気軽に発信し、それに対する反応を得て仲間を見つけていく中で、「あなたも同じような悩みを抱えているんですね」「あなたも同じような夢を見ているんですね」といった出会いが生まれれば、互いに背中を押しやすくなり、キーパーソンも生まれやすくなると感じました。キーパーソンになっている人々は、大抵自分自身を「ゼロからイチ」へと動かした経験を持っています。そうした人々と出会い、語り合うことで、これまでキーパーソンではなかった人がキーパーソンへと変わっていく可能性が高まると思います。少し引いた視点で見ると、様々な社会資源が、例えるなら泡のようにあちこちで生まれては、社会的に必要とされなくなればずっと消えていく。でも、また必要になれば、必要なものが生まれやすい、作りやすい。そういった仕組みができていけば、主体的かつ継続的な活動が生まれるのではないかと思います。

会長 ありがとうございます。今の発言は、特に審議事項2に関連して、担い手となる大人をどう発掘し、育んでいくかという点にも関わる提言でした。
他にいかがですか。

委員 もしかしたら既に存在するのかもしれませんが、P T AであればP T Aだけの、公民館であれば公民館だけの集まりはあっても、本日報告されたような、地域に根差した様々な活動のキーパーソンと、その次の担い手となる人々が一堂に会する場があれば良いのではないかと感じました。そうした場があれば、ある団体が抱えている課題が、他の団体ではうまく解決されているといった情報交換ができるはずです。そのような場を設けることも重要だと思います。もう一つは、「賞」を創設してみるのはどうだろうかと思いました。「青森県地域活動功労賞」のようなものです。やはり、そのようなものが最も費用対効果が高いというか、それほど費用はかからずに、名誉を与えることができます。そして、「私たちの地域はこんなことで表彰されたんだ」ということが、さらなる地域活動の盛り上がりにつながるのではないかと感じました。

会長 ありがとうございます。先ほどの「認めてもらいたいという欲求がある」という意見も含め、こうした「賞」のような取組も大切なことかもしれません。
他にはいかがですか。

委員 私も、国などの制度はあると思いますが、もっと地元に着目した形で、県などが活動を認める「賞」を設けてほしいです。「細谷おらほの寺子屋」の立役者である中村さんも話していましたが、活動を認めてもらうことは非常に重要なことです。また、活動を進める上で困ったことや悩みを話し合える場も必要だと思います。そうした時に、育成プロジェクトなどに参加して仲間を作り、その仲間同士で問題を解決し合っていると話していたので、そういった機会があれば良いなと思います。

会長 ありがとうございます。他にはいかがですか。

委員 先ほどの話の中で「二番手」のグループという言葉がありました。例えば、大鰐の取組では、後継者をどう育てるかという点が大きな課題である一方で、その活動が直接的ではないにせよ、良い影響を生み出しています。具体的には、地元の大鰐出身の若者がUターンしてきて、空き店舗を自分たちでリノベーションし、「フロムオー」というカフェを運営しながら、「わぁんどすとリー」といった地元のイベントを仕掛けるなどの活動をしています。やはり、若い人たちが刺激を受けて育ってきているという事例が、実際にあります。そうした「二番手」となるこれからの世代にどう影響を与えていくか、先ほどのSNSの話も含め、良い循環を生み出し、ポジティブな発信をしていくという仕組みを、提案の中に盛り込んでおくことが非常に重要ではないかと感じています。

会長 ありがとうございます。他にはいかがですか。

委員 本日の話を聞いて、「当事者意識」というのが非常に重要だと感じました。課題を感じている人は、様々なきっかけで問題に気付くと思いますが、そもそもそうした意識

がない方、例えば、本当は困っているけれども、関わらない方が楽だからと、自分の世界だけで暮らしている方などもあります。そうした人々が、一歩外へ出て何かを経験し、当事者意識を持つきっかけを作ることができれば良いのだらうなと感じています。

教育の立場としては、親をなかなか変えられないのであれば、こどもに経験を積ませ、そのこどもたちが将来、地域やPTA活動に積極的に参加できる大人になるように育てていくしかないのかなと思います。特にPTA活動は今、様々な過渡期にあり、その中で千刈小学校の取組は、「こんなにがんばっているところがあるんだ」ということを知る良い機会になりました。コミュニティスクールも現在推進していますが、うまくいっているところと、どうすれば良いか分からず悩んでいるところがあります。こうした成功事例を知る機会があれば、関心のある人はそこから一歩を踏み出せるのかもしれませんが。表彰制度も同様で、PTAにも毎年各地区に表彰の割り当てがありますが、現状では何とか候補者を選んで表彰するだけで終わってしまっています。そうではなく、例えばポスターなどで「こういう活動をしている、こういう人がいる」という情報が得やすくなるように、表彰とセットで情報発信があれば、課題を感じている人が前に進むためのヒントになるのではないかと考えました。

会長 ありがとうございます。他にはいかがですか。

委員 三つの諮問事項すべてに関わるかもしれませんが、皆様の報告を聞き、私自身が現在公民館のような施設を運営している立場としての実体験からも思うのですが、「大人が楽しんでいる」ということが、とても重要なのではないかと感じています。大鰐の相馬さんの活動は、まさにその典型であり、それを仕組み化したのが「悪口を言わない」というルールなのかなと思いました。そのように大人が楽しんでいれば、もちろん、好きなことをするためには好きではないこともしなければならぬという苦労は必ずあると思いますが、それをしてもお余りあるほど楽しいからやっている、やっってしまう、ということがあると思います。そうした情熱を持っている人がいて、その熱意に周りが影響されるということが、かなり効果的なのではないかと感じています。

こどもの立場からの考えが強くなるのですが、こどもの頃「こども」と一括りにされることに違和感がありましたし、今、私の施設に入っているこどもたちの支援施設のこどもたちを見ていても、「こども」とか「小学生」といった括りで見ってしまうのは、もったいないと感じるくらい、一人ひとり違います。かつては人口も多く、こどもたちの数も多かったので、まとめて対応せざるを得ず、その仕組みは正解だったと思っていますし、決して否定したくありません。しかし、こどもが減り、学校や公共施設も減っていく現状に合わせて考えれば、こどもたちの数が減った分、一人ひとりに目を向けることは十分に可能なのではないかと思います。そうなった時に、何らかの「評価基準」を持つことがかなり重要になってくると思います。活動の成果は数値に置き換えられないため、目標を立てても、それが達成されたかどうか、今どの段階にあるのかを測るのが非常に難しい。しかし、数値化できないからこそ、定性的な部分で「評価するための基準」のようなものが組み込まれていると、活動に参加する側も関わりやすくなるのではないのでしょうか。「これなら自分も参加できるかもしれない」と思え

るような。例え非常に壮大で、誰にとっても良いことであっても、自分がどう関わって良いのか、自分の暮らしとどう結びつくのかが分からないと、長期的な視点で関わるのは難しいと思います。掲げられたスローガンが、自分の日々の暮らしの先にどう関わってくるのかを接続するための基準のようなものが含まれていると、まず大人がそれに向かって楽しむことができ、その姿を見て、こどもたちは勝手に学んでいくのではないかと思います。教育現場にいる方が多いのでご存知かと思いますが、こどもたちは私たちが思っている以上に、大人の姿を勝手に見ているものです。そうしたこどもたちの力、一人ひとり違う人間であるということを認識し、こどもたちの力を信じる。そのために、私たち大人の世代が研鑽を積んでいくという姿勢があっても良いのではないかと思います。

会長 ありがとうございます。こどもたちが、この地域の中で自分は大切にされてきた、大事に育てられてきたという実感を持てる、そうしたこどもが増えるということが、非常に重要な評価指標になってくるのではないかと、これまでの審議会の議論を通じても感じていたところです。「評価」という言葉を使うかどうかは別として、何を大切にしていけるのかということは、答申の中で明確に謳っていければ良いのではないかと思います。

皆様から今回報告いただいたこと、また、それぞれ答申の柱や内容に関して発言いただいたことについては、事務局と私の方で改めて整理し、骨組み作りに着手していきたいと考えています。

では、案件（２）はここまでとします。最後の案件になりますが、今後のスケジュールについて、事務局から説明をお願いします。

（事務局から「今後のスケジュール」「県外実地調査」「調査研究事業」について説明）

会長 ありがとうございます。今後のスケジュール、そしてそれに関連する県外の実地調査、さらに県内のこどもたちを対象とした調査研究事業（アンケート）について説明がありましたが、何か質問等がありますか。

委員 調査はどのような主体で、どのように実施するのでしょうか。学校に直接お願いする形ですか、それとも民間の調査機関が入るのでしょうか。

事務局 今回は、こちらから直接学校へ依頼し、二次元コードを用いて児童生徒が回答できるような形を考えています。

委員 全数調査ですか。

事務局 全数調査を考えております。

会長 他にはよろしいですか。本日はどうもありがとうございました。では、事務局の方

にお返しいたします。

3 閉会

(内容省略)